

国際日本研究センター 海外大学・機関 調査表

| | |
|---------------------------|---|
| 訪問先 | ハンブルク大学精神科学部アジア・アフリカ学科日本語・日本文化専攻 |
| 調査日時 | 3月23日 14時～22時 |
| 調査対象 機関・学 科・個人 名 | Universität Hamburg Asien-Afrika-Institut Abteilung für Sprache und Kultur Japans Prof. Dr. Jörg B. Quenzer 宮崎登 講師 |
| 調査目的 | 当該機関の現況、特に BA 制度導入以降の変化、問題点について具体的な情報を得る |
| 調査方法 | インタビュー。ゼミ等参加・観察 |
| 調査結果 | <p>1 概要 1914年に創設され、ドイツの日本学研究では最も古い機関として、古典文学・思想などの専門的知識の獲得と日本語能力の育成を結びつけるという伝統を新しい BA 制度の下で維持し、発展させるという課題に取り組んでいる。</p> <p>調査に対応して下さった Prof. Dr. Jörg B. Quenzer は古典文学、中世仏教・文学の若手研究者で、2004年からハンブルク大学に勤務されている。宮崎登講師は日本で大学を卒業、スポーツ紙記者を経験した後、渡独してハンブルク大学で現代文学の MA を取得し、1984年から日本語等の教育に従事されてきた日本語・日本文化専攻最古参の先生である。</p> <p>2 教員 教授 2 名、講師 2 名、教育担当学術職員 7 名が専任として教育に従事している。</p> <p>3 学生</p> <p>旧制度（マギスター課程）では毎年 5～60 名の主専攻学生と 20 名程度の副専攻学生が毎年新規に履修し、うち 15 名程度が日本学のマギスター学位を取得していた。</p> <p>新制度（BA 課程）では、2009 年度入学者の場合、主専攻が 32 名、外国人（ウクライナ）人枠が 4 名、副専攻が 9 名となっている。修了者はまだ出ないが、高い割合で BA を取得できそうである。</p> <p>4 教育課程改革</p> <p>（1）BA 制度は 2007 年度から導入され、アジア・アフリカ学科の履修期間は 4 年間となっている。これは学科の特質上 1 年間は外国留学する必要がある</p> |

| | |
|----|--|
| | <p>ので、その期間を組み込んでいるためである。学生には1年間留学するように強く指導し、留学者は期間中の学習状況にかかわらず30単位取得できるようにしている。</p> <p>(2) とはいえ、履修期間が4年に短縮されたため、どうしても基礎としての日本語教育に時間を振り向ける必要がある。そのため伝統とされる日本学の専門教育が不十分となる傾向がある。時事問題などで日本人専門家を講師に依頼するための非常勤枠も、語学増員のために削減されている。語学専門学校化を憂う教員もいる。いずれにせよ、本格的な日本学研究はマスター課程(2年)、ドクター課程(3年)でということになるだろう(ハンブルク大学では国際関係・日本学のマスター課程を開設している)。</p> <p>5 留学生交流の問題点</p> <p>(1) 日本語・日本文化専攻では大阪市立大学と大学間協定を結び、積極的に留学させている。毎年30名程度留学しているが、日本からの留学生は10名程度と大きなアンバランスがある。そこで夏季にサマースクールを開催してアンバランスを埋めている。</p> <p>(2) 日本からの留学生が少ない原因として、履修科目などの条件が厳しく、留学期間の単位取得が困難となることが挙げられる。協定を締結するということは相手の教育機関としての水準を信頼したことなので、留学生に様々な条件を付加する必要はないのではないか。</p> <p>6 その他</p> <p>訪問当日は、19時から日本文化センターとの共催で、若手文化評論家佐々木敦氏による講演会が大学構内で行われた。それに先立ち、佐々木氏をゲストにJörg B. Quenzer教授の指導学生が参加する特別ゼミが行われた。学生たちはほぼ全員が日本留学経験者で、佐々木氏が紹介する日本のサブカルチャー状況に関しての知識もあり、日本語で的確に質疑応答が展開したのには感心させられた。</p> <p>講演会にも参加したが、学内外から50名ほどが集まり、佐々木氏の「ポスト村上」文学に関する報告(逐語通訳)に聞き入っていた。講演後、日本語で質問する参加者もいた。</p> |
| 備考 | <p>日本学のようにドイツ語話者にとって習得の困難な言語習得を必要とする地域研究の場合、3年間のBA課程では無理がある。フンボルト大学では1年の準備課程を置くことでこの問題を克服しようと試みたが、アジア・アフリカ学科の他の地域専攻との不均等のため廃止され、日本語能力をどう育成するかという課題に直面している。ハンブルク大ではアジア・アフリカ学科全体でBA</p> |

課程を4年としているが、内容的には日本語教育の比重が大きくなるというジレンマに直面している。両大学とも旧課程に相当する教育・学習はマスター課程で初めて完了すると考えているようだ。その場合、BA課程の到達目標を何に置くのか、基礎としての日本語運用能力の形成か、日本の社会文化の学習・研究かという日本学の古い問題が、改めて問われているといえよう

(調査：谷 和明)



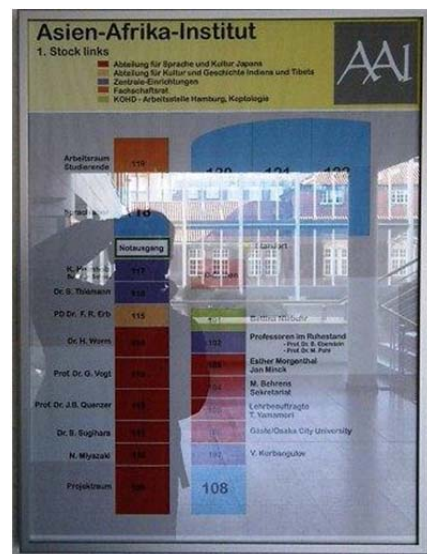
アジア・アフリカ学科棟



アジア・アフリカ学科棟入口



アジア・アフリカ学科棟入口広間



アジア・アフリカ学科棟2階左側案内図（赤い部分が日本語・日本文化専攻のエリア）



刊行物の展示



日本語・日本文化専攻エリアの廊下の様子



特別ゼミの様子

中央帽子を着用しているのが佐々木敦氏。その右が
Quenzer 教授。一人おいて右が宮崎講師。



講演会で挨拶する Quenzer 教授



宮崎登講師

国際日本研究センター 海外大学・機関 調査表

| | |
|-----------------------------------|---|
| 訪問先 | フンボルト大学第Ⅲ哲学部アジア・アフリカ学科日本語・日本文化センター |
| 調査日時 | 2010年3月24日 10時～13時 |
| 調査対象 機関・学 科・個人 名 | HUMBOLDT-UNIVERSITÄT ZU BERLIN Zentrum für Sprache und Kultur Japans am Institut für Asien- und Afrikawissenschaften Frau Diplom-Sprachmittlerin Jutta BORCHERT |
| 調査目的 | 当該機関の現況、特にバチュラー制度導入以降の変化、問題点について |
| 調査方法 | インタビュー |
| 調査結果 (インタ ビューか らの摘 要) | <p>1 概要</p> <p>当センターはドイツにおける最も古い日本学教育・研究機関の一つであり、旧東ドイツ時代にはその中心機関として多くの人材を輩出してきた。</p> <p>ドイツ再統後は大学の組織再編・合理化が行われ、かつ5年前からはBA制度の導入という大改革も行われ、現在はその移行期である。合理化により縮減された人員により、移行期の様々な課題に取り組んでいる。</p> <p>さまざまな文化交流事業の場となってきた森鷗外記念館も併設されており、組織的には日本語・日本文化センターは、日本学科と鷗外記念館を併せたものとなっている。</p> <p>調査に対応して下さった Jutta BORCHERT 先生は日本語教育分野の責任者で、東ドイツ時代にこの日本語科を卒業し、以後このセンターに勤務してこられた最古参の方である。</p> <p>2 教員体制</p> <p>専任教職員は所長（教授職）を含め5名で、そのうち3名が6名の非常勤講師とともに学生の教育に従事している。</p> <p>3 学生</p> <p>(1) アジア・アフリカ学科全体の入学定員は140名、うち日本語科は30名である（昨年度の40名から減）。日本学専攻の学生数は2000年頃には400名を超えていたが現在は半数程度となっている。</p> <p>(2) 10年前にはカラテやジュードから日本に関心を持つようになった学生が多かったが、近年はアニメ、マンガををきっかけにしてというのが増えている。</p> <p>4 教育課程改革</p> <p>フンボルト大学では2005年度からBA制度を導入した。従来のマギスター課程では5年～8年をかけて論文を仕上げ（入学者の半数以下）「日本学マギス</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>ター」の資格を取得していた（現在もこの旧課程の学生が 46 名残っている）。新しい BA 課程は 3 年間で、アジア・アフリカ研究科の学生は修了すると「地域研究（アジア・アフリカ）学士」の称号が授与される。2005 年の日本科 BA 課程入学者は 25 名で、そのうち BA 取得にこぎつけたのは 15 名である。</p> <p>（この数字を見ると、なんらかの卒業証書を取得（しかも短期に）できる学生数を増やすという BA 導入の目的は達成できているようである。）</p> <p>けれどもこの新制度導入に伴い多くの問題が生じている。</p> <p>（1）旧課程では最初の 2 年間ほどは日本語を集中的に学習し、さらに多くは日本に留学し、その後専門分野の学習を深めて論文を書くことができた。しかし 3 年間の BA 課程に日本語教育と専門教育とを組み込むことは至難の業で、どちらも中途半端になってしまう。</p> <p>それへの対応策として日本科入学者には 1 年間の準備課程を導入し、週 16 時間日本語を集中的に学び 3 級程度の実力をつけてから BA 課程を始めるようにした（中国学科も）。しかし、この制度は他の地域（言語）科からは特別待遇だと批判され、かつ学生にも 1 年間余計に履修しなければならないと不評であったので、昨年度から廃止された。</p> <p>そこで現在は、最初の 2 年間に週 10 時間の日本語科目を履修させるようにしている。しかし最後まで履修する学生は少なく（6 名/25 名）、しかも履修しても 3 級程度がせいぜいである。日本語の習得のため、学生には留学を強く勧めている（留学先：東海大、法政大、中央大、立命大、立大等）。</p> <p>（2）旧制度では「日本学マギスター」であったのが、新制度では「地域研究（アジア・アフリカ）学士」となった。学生にとっては選択幅が拡大されたが、日本科にとっては逆風となっている。時間のかかる日本語学習を回避して、他地域（他言語）に変更したり、日本語を使わない日本研究で BA を取得する傾向がある。</p> <p>（3）逆に週 10 時間では不十分と考える学生は、ベルリン自由大学日本語科の日本語科目も聴講している。</p> <p>（4）以上に対応するため、日本科では「日本学マスター」課程の新設を計画している。しかし、これには最低 2 名の教授職増員が必要であり、現在の財政状況では容易ではない。日本の大学の協力も得て実現したい。</p> |
| 備考 | <p>2005 年前後にドイツの大学に導入された BA 制度は従来の教育システムを一変する大改革であり、現在も教員、学生双方の戸惑い、混乱が続いている。従来 7～8 年かけて行っていた教育・学習を 3 年間に短縮することは不可能であり、BA の到達目標をどこに置くか、そのために従来の科目からどれだけを BA に配置するかを巡っての試行錯誤の段階といえる。</p> <p>教員側には必要なものは網羅すべきという傾向があるが、それは学生からは</p> |

詰め込み教育と批判されることになる。フンボルト大学日本語・日本文化センターもそのような文脈の中で、しかも他の都市と比較して数の多い大学での合理化・人員削減というベルリン独自の厳しい条件の下で、新しい制度を模索しているという印象を得た。

(調査者 谷 和明)



日本語・日本文化センターの前景



センター入り口のネームプレート



掲示板



玄関の案内板



Frau Diplom-Sprachmittlerin
Jutta BORCHERT



センター刊行物